

第十四号

令和七年

尚
語
文
学

しょうけいぶん

論文

- | | | |
|------|---|-------|
| 飯富章宏 | 「源氏物語と能楽 — 「源氏能」 の考察 — | 1-6 |
| 山本歩 | 「光の中にひそむもの — 大石黒石「黄色夫人の手」考 | 7-10 |
| 畠山真一 | 「YouTubeのコメントからみたアイドルグループのメンバー脱退に関するファンの受容分析」 | 11-16 |

源氏物語と能楽——「源氏能」の考察——

飯富章宏（能楽師）尚絅大学非常勤講師「日本伝統文化」担当

【序文】

2001（平成13）年にユネスコより「人類の口承及び無形遺産に関する傑作」として宣言、また2008（平成20）年には「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に記載され、600年以上継承された、いわゆる世界遺産に選ばれた「能楽」という視点から日本伝統文化を考察してみる。「能楽」は仏教的世界観を基底に自然の中に神聖なるものを感知し、畏敬する演劇であり、観ずる者に「能」を貫く生と死の連結を伝え、死者の声に生の充実感を確認させるユニークな演劇でもある。

この稿では、1000年程度昔に編まれた「源氏物語」と「能楽」の作品の内、源氏物語に基づく「源氏能」の世界をみることで、能楽の発展過程を考えてみようと思う。「源氏能」とは「源氏物語」を本説とする一群の能作品をいい、以降この意味で使用する。

【一】

以下、世阿弥と『源氏物語』（松岡新平）より抜粋

…世阿弥のところで『源氏物語』がどのように受け容れられたか、もしくはは受け容れられなかったか、という話をしてみたい。結論から言くと、世阿弥は、生涯を通して「源氏物語」を敬して遠ざけていると思う。足利義満の場合、その王権篡奪のイデオロギー的背景の一つに「源氏物語」があることは確かだろう。もし、義満時代に「源氏物語」が政治的な場の中で動いている

状況があるとするれば、『太平記』物の上演を避けたり、きわもの際物の上演を避け古典物にレパートリーを絞るところからもうかがえる世阿弥の政治的な敏感さからして、世阿弥が『源氏物語』を敬して遠ざけるような態度をとるのは、当然といえるかも知れない。

〔引用①「世阿弥と『源氏物語』」（p.1）

能楽についての研究でも著名な松岡新平氏は世阿弥の作品の、源氏物が少ないことについてこの稿の中で以下のように考察している。①政治的配慮により、あえて題材としなかった。②幼少時、あまりに「若紫」「紫上」「源氏の幼少期」に擬せられ、童として処せられた経験から遠ざけた。③二条良基から連歌詠みの規範とされ、あまりに源氏礼賛となったので、かえって扱いにくかった。④声変わりし成人になった世阿弥にとって、源氏を題材とする作品は自分にふさわしくないと思った。などの理由を挙げている。

私も氏の考えに基本的に同感である。世阿弥作の能がすべて現代に残っているわけではないが、現在確認できる世阿弥作の能の内、「源氏物語」からの能、（以降「源氏能」と呼ぶ。）は『浮舟』一曲のみである。後の金春禅竹以降、数多く「源氏能」が世に出るが、世阿弥作が一曲のみであるのは、意外と思える。

【二】

世阿弥も能楽論『三道』には、以下のように記している。

女体能姿。一風体を飾りて書くべし。これ、ことに舞歌の本風たり。その

内において、上々の風体あるべし。あるいは女御・更衣、葵・夕顔・浮舟などと申したる貴人の女体、気高き風姿の、世の常ならぬかかり・よそほひを、心得て書くべし。しかれば、音曲よしかりをも、よくよく心得て、道の者の曲舞音曲などのやうにはあるまじきなり。長けたるかかりの、美しくて、幽玄無上の位、曲も妙声、振り・風情もこの上はあるべからず。少しも不足にてはかなふべからず。かやうな人体の種風に、玉の中の玉を得たるがごとくなる事あり。かくのごときの貴人妙体の見風の上に、あるいは、六条の御息所の葵の上に憑き崇り、夕顔の上の物の怪(け)に取られ、浮舟の憑物などとて、見風の便りある幽花の種、逢ひがたき風得なり。古歌に言ふ。「梅が香を桜の花に匂はせて柳が枝に咲かせんより」、なほありがたき花種なるべし。しかれば、かやうの風に相応したらん芸人をや、無上妙感の達人とも申すべき。

〔引用②〕「世阿弥 風姿花伝・三道」(p.296)

この中を現代語訳で見ると

女体歌舞能の中でも、最高の部類の能がある。例えば女御・更衣、もしくは葵の上・夕顔の上・浮舟などというような、貴人の女性の主人公が、気品のある姿で、世間一般とはまったく違う趣きや服装であるということをも、よくわかった上で書くべき…〔引用②〕「世阿弥 風姿花伝・三道」(p.297)

また、こうしたこの上なくすばらしい貴人の姿に、あるいは、六条御息所が葵の上に憑いて崇ったり、夕顔の上が物の怪に魅入られたり、浮舟の憑物の狂乱などといった、見応えのあるすばらしい花の種ともいえるべき題材は、めったに出会えぬほどの効果的な素材である。

〔引用②〕「世阿弥 風姿花伝・三道」(p.299)

とある。

「女御・更衣、葵・夕顔・浮舟などと申たる貴人」とは「源氏物語」の中の女性と考えるとよいだろう。また「六条御息所の葵の上に付き崇り」は能「葵上」を、

「浮舟の憑き物」は能「浮舟」をそれぞれ背景にした説と考えられる。六条御息所の嫉妬の場面を描いた「葵上」は、世阿弥の先輩犬王道阿弥が得意としていた曲とされている。「浮舟」は、横越元久という武家歌人が詞章を書き、世阿弥が作曲した曲である。これらを女体の能の作品の中でも「玉の中の玉」と高く評価している。

【三】

「夕顔の上の物の怪に取られ」に関しては、現行曲「夕顔」にはこのような内容は見いだせず、またこの時点で「夕顔」という能は成立していない。「半部」は内藤河内守作で明らかに後代の作品である。『三道』にあげられる世阿弥の推奨曲二十九曲には、「浮舟」を除いて『源氏物語』に取材した曲はない。その「浮舟」もテキストは他人が書いたものだ。とすれば、「三道」が書かれた応永三十年、世阿弥六十一歳の時点で、世阿弥自作の源氏能はない、と考えてよい。ただ「須磨源氏」が世阿弥の作かどうか意見の分かれるところだが、もし世阿弥が作ったとしても、世阿弥の源氏能は最晩年の一作だけで、しかも女性物はない、ということになるだろう。

ただ『三道』は、能の主人公となりうる男性として、「業平・黒主・源氏、かくのごとき遊士」のように光源氏をあげる部分がある。そうしてみると、『三道』の源氏能記述は、息子たちの世代に対して、「これからは源氏能の時代」ということを示唆したもの、と見ることもできよう。事実、この後、金春禅竹の「野宮」「玉葛」をはじめとして、源氏能が多く書かれる時期が到来するのである。

【四】

源氏能の考察として、まず「葵上」をとりあげてみよう。この曲は世阿弥より以前、近江猿楽の名手犬王道阿弥作との見方が一般的である。確実性の検証はこれからの文献調査に任せるとして、この作品の概要を観てみよう。

題名は「葵上」だが、実際には葵上は登場しない。舞台正面手前に一枚の小袖が置かれ、これが無抵抗のまま、物の怪に取りつかれて苦しんでいる葵上を表

す。物語の中心は、鬼にならざるを得なかった御息所の恋慕と嫉妬の情である。御息所は元皇太子妃なので、鬼に変貌しても、不気味さの中に品格を表す必要がある。特に、前場の最後、扇を投げ捨て、着ていた上着を引き被って姿を消す場面では、感情の盛り上がりをいかに表現するかと同時に、高貴さを損なわない動きの美しさを要求される。

この作品には、『源氏物語』らしい雰囲気を出するための様々な仕掛けが施されており、前半では、見せ場の謡に、『源氏物語』の巻名が散りばめられている。また御息所が葵上への嫉妬に悩む直接の原因となったのは、賀茂の祭の車争いに破れたことであるという室町時代の解釈を反映して、御息所は前半破れ車に乗って登場するという設定になっている。

さて、この能の本説(出典)は「源氏物語」のどこにあるのであろう。葵上(光源氏の正妻)が初めての出産の後、患っている場面は葵の巻に見える。この巻のはじめ賀茂祭(葵祭)の際に、葵上と御息所の有名な車争いの場面があり、その時に恥をかかされた御息所が葵上の産褥を襲うという展開だが、本文中には明確にそれとはあらわされていない。ただ、源氏が御息所の生霊を垣間見たくらの表現である。

しかし、室町時代には、御息所が葵上の命を取り殺したと、はっきり解釈されていて、作者はその前提で能を創作している。後年、世阿弥の改変が行われたのは確かであろうが、話の流れはこの通りである。

源氏物語での御息所は優雅さや気品といった表の姿と、内面での嫉妬や女の性との対比といった表現を感じるが、能「葵上」では情念の激しさが強調される。世阿弥は、この能のインパクトの強さに惹かれていて、御息所を現すには「三道」に記述しているように

…かくのごときの貴人妙体の見風の上に、…見風の便りある幽花の種、逢ひがたき風得なり。

と評しているのである。現代では「葵上古式」として、車を出し、青女房がその轅に縋りつく演出が残っているが、世阿弥はそのような部分を省き、後世に残

す改変をしたのかもしれない。

世阿弥の『申楽談儀』における大王所演《葵上》への言及を手がかりにすると、後妻打ち、怨霊調伏など本説の『源氏物語』には見られない場面を再検討した上で、『葵上』の改作が特に演出の面を中心に行われたと思われる。本曲が本説の『源氏物語』と隔たりがあることについては、初期の源氏能と言える《葵上》の段階では観客側の『源氏物語』理解が十分でなかったことに加え、物語に忠実であることよりも前場に見られるような「後妻打ち」などの演出の方が興行上好まれたためではなかったかと思える。

この点、後述する「野宮」とは趣を異とするように思える。

【五】

《野宮》の作者と考えられる金春禅竹は、猿楽能の本家ともいうべき円満井金春流の惣領として生まれた。若い時から世阿弥に憧れ、私淑する。世阿弥にも可愛がられたようである。後継者と目していた元雅を失ってから、流儀は違うがこの若き才能に期待をかけたのであろう。

年若い佐渡に島流しの憂き目を受けた世阿弥は、留守宅をこの禅竹に頼り、文通をしている。その中で娘婿の世話に感謝するとともに、この若き才能の作品に細かく評を加えている。ここでは紹介しないが、我が子以上の愛情と、この芸能の将来を託したいとの気持ちがあふれているように思える。

以上を踏まえて、「野宮」を考察すると、御息所を描くのに品位、教養や心情の細やかさの表現を踏まえた上で、例の車争いでの惨めさや口惜しさも表現し、そして、世阿弥の求める幽玄の世界に連れていく。

舞も世阿弥が晩年に完成したであろう序ノ舞を効果的に用い、そのあと破ノ舞を配することで、御息所の複雑な心情の変化を表現している。

禅竹のもう一つの源氏能「玉葛」では、逆に源氏物語の本説とは離れて、男たちには翻弄される玉鬘の内侍をカケリという短くも激しい内的表現であらわしている。今回は紙面の都合で、この曲については深く考察しないが、女物として、三番目的な部分と四番目的な部分を内在している特殊な曲であることだけのべてお

こう。

【六】

「半部」について考察する。この曲は内藤河内守作とされる。内藤藤左衛門(内藤左衛門とも)「後二ハ河内守ト云フ」であろうとされている。『能本作者註文』には内藤藤左衛門作とされる三曲のうちに「夕兒上」という曲があり、これが「半部」の別名かとされている。「兒」は「かお(顔)」なので、夕顔の上を主人公とした半部であろうということかと思われる。また『二百十番謡目録』では「半部内藤左衛門作」と明記されている。ただし『自家伝抄』をみると、夕顔を世阿弥作と記す一方で「夕顔上 異作」の作者を「蜷川」あるいは「蜷海」などと記している。この「夕顔上 異作」は半部のことと思われる。ここでは『半部』は内藤河内守作としておく。

本曲の作者らしき「内藤河内守」は、古典や文芸の素養をはじめ、能の舞台と上演に関する相当の知識を備えた人物であり、細川高国・大内義興・三条西実隆の間にあった交流は、内藤河内守にその文芸集団の一角に接点を持たせ、彼らの文芸の世界に触れやすい環境が提供されていたと考える。

《半部》の詞章は観客に遊女を思い浮かべさせる歌に基づく表現を含んでおり、舞台上には源氏と夕顔の女の出会いの喜びのみが「五条あたり」を背景に広がっている。『源氏物語』や中世の梗概書『源氏小鏡』『源氏大概真秘抄』とは違い、本曲は夕顔の花の贈答に関わる隨身や侍女を省略し、その行為を源氏と夕顔の女に任せて、水入らずの情感あふれる恋の物語のような印象を与えている。

本曲の作者は先行作品の長所を見極め、新作に再構成できる力量のある人物であったといえよう。このような作品が登場するのは、武士層の文芸の素養が向上した応仁の乱以降と捉えるのが自然ではないかと思う。

【七】

その他の源氏関係曲のうち、「源氏供養」を考察したい。この曲には源氏物語の中の人物は現れず、また、物語内のエピソードとも関係ない。源氏能には含め

ていない。主人公はその作者「紫式部」である。歴史上厳密にはこの人の本名は残っていない。宮中に出仕しており、その時の役名は「藤式部」とある。姓が藤原、父の官職が式部の丞であったから、と伝えている。ただ、その後源氏物語を現しており、その主要な登場人物である「紫上」になぞらえて「紫式部」と呼ばれているようである。いつ頃からこのように呼ばれていたか定かではないが、後年、源氏物語に携わった藤原定家辺りからかと思われる。猿楽発展期の室町時代には、紫式部が近江石山寺に参籠して、源氏物語を着想したと信じられているようである。

ワキは安居院法印で石山寺の観世音を信仰し、参詣すると、急に紫式部の霊に憑依された里女に呼び止められ、供養を頼まれる。実は、この場面展開はかなり唐突である。後場を活かすために、簡略としたとも考えられるが、私には腑に落ちない。

その後も、掛け合いのあと、短い謡で女は姿を消す。型のごとく間語があり、後場になるが、これも型の通りで、一声、ワキとの掛け合い、上げ歌でまた、地次第からクリサシクセと流れていく。また、通常では中ノ舞などの囃子演奏での舞はない。クセ中に舞い、キリの謡で終了する。

この形式は、観阿弥が得意とした曲舞の曲、「百万」「山姥」や世阿弥作と考えられる「桜川」「三井寺」などの狂女物などと形式が似通っているように思える。この「源氏供養」の作者は、世阿弥説、河上神主説(以上『能本作者註文』)、金春禅竹説(『二百十番謡目録』)があるが、世阿弥か禅竹のにおいがする。

もともと源氏供養は、紫式部の亡霊が『源氏物語』に狂言綺語を記して好色を説いた罪で地獄に落ちた」と告げたことから、その苦を救うとともに読者の罪障をも消滅させるために、法華經二十八品を各人が一品ずつ写経して供養した法会である。具体的な法要は治承(1177年から1180年)・文治(1185年から1189年)のころに始まったとされる。また、中世にも実際に何度か行われている。

この能の全詞章中に、28の巻名が出てくるが、法華經二十八品に擬しているのであろう。キリには最終巻の「夢浮橋」が詠みこまれている。

この曲は室町時代後期には人気があったようで、とくに、豊臣秀吉は能楽の中で特にこの源氏供養を好み、1592年（文禄元年）から1593年（文禄2年）にかけて自ら7回舞った記録が残っている。

他の源氏能と異なり物語の中身とは関係ない場面展開であるが、詞章に源氏の巻名が読み込まれている。これは、室町時代に流行った名寄せの形で、前述した「葵上」「野宮」などでも散見できる。

ワキの安居院法印澄憲は平安時代後期から鎌倉時代初期にかけての天台宗の僧。父は藤原通憲（信西）で説法唱導の名人として知られる。息子の聖覚は法然に帰依（きえ）し、その弟子として高名となった。この聖覚も唱導の名手であった。澄憲譲りの聖覚の才能により、浄土宗は唱導の力を取り入れ、世間への布教が進んだ。また、法然門下の親鸞は、聖覚を尊敬し、聖覚の安居院流唱導の技術を手本に、浄土真宗の庶民布教を行ったとある。

この曲が天台宗か真宗のどちらの宗教的素地にあるかは不明だが、一般的に受け入れやすい曲だったのであろう。

私事で申し訳ないが、私の本業である大倉流小鼓では、この「源氏供養」サシクセキリを初心の稽古曲としている。一応の初級の稽古を終え、曲舞形式の曲「清経」「百万」「桜川」「柏崎」「源氏供養」と進む。急に覚える分量が増えて、ここで脱落する生徒さんも多い。これらは浄土教系（浄土宗、真宗、時宗など）の曲である。いわゆる念仏物が多いが「源氏供養」は天台系法要を模したように思える。

【八】

問題として残るのは、「須磨源氏」である。源氏物語には本説となるような場面は見当たらない。この曲では「若木の桜」と「月」がテーマと考えられる。前場で登場する「若木の桜」は「忠度」でも扱われるが、源氏須磨託居の際のゆかりの木という。また、後場では月澄む須磨の浦に天から音楽が聞こえ、光源氏が月光の中から「童男」としてあらわれ「青海波」を舞うのである。源氏は今は兜率天に住まいしている。兜率天とは、遠い将来に罪深い人々を救うため降臨する

という弥勒仏（みろくぶつ）の住まう天上世界のことと、本作において兜率天からやって来た光源氏は、聖なる救世主のイメージとして描かれている。

観阿弥世阿弥の能として、須磨浦を舞台とした「松風」という名曲があるが、この曲も月をテーマにし、前段のシテツレの登場部分には源氏物語の須磨の巻の文章が効果的に用いられている。また、悲運の貴公子源融（みなもとのおとる）を主人公とする「融」にも、源氏物語の影響を観ることができる。このような源氏能ではないが、源氏物語の文章を用いた曲もまた、稿を変えて考察してみたいと思う。

【結句】

源氏能と呼ばれる「源氏物語」に題材をとる一群の能作品を通して、能楽の発展期を考察してみた。最初の松岡新平氏の世阿弥と源氏物語との関係は考慮するが、世阿弥のその他の作品には、源氏物語からの引用や、着想が多くあり、世阿弥も意識はしていたのであろう。また、その後、多数の源氏能を生み出した原動力は、やはり世阿弥に発すると考えても間違いはなからうと思う。稿末に現在源氏能と分類されている作品を登場人物で一覧する。これまで、拙稿をお読みいただき感謝します。

（注）〔引用①世阿弥と『源氏物語』（松岡新平）編集・発行 中世文学会／制作・登載者 中世文学会〕

〔引用②「世阿弥 風姿花伝・三道」現代語訳付き（角川ソフィア文庫）（p.295）.（株）KADOKAWA Kindle 版〕

〔以降の引用は Wikipedia より抜粋〕

源氏能を源氏物語の登場巻順に並べる。光源氏は最後。

- ① 空蟬 〈空蟬〉 〈碁〉
- ② 夕顔 〈夕顔〉 〈半蔀〉
- ③ 六条御息所 〈葵上〉 〈野宮〉
- ④ 明石上 〈住吉詣〉
- ⑤ 朝顔斎院 〈権〉

⑥玉葛

玉葛

⑦落葉宮

〈京落葉〉

〈陀羅尼落葉〉

⑧浮舟

〈浮舟〉

〈木靈浮舟〉

⑨ 光源氏

〈須磨源氏〉

〈住吉詣〉

〔引用 比較日本学教育研究部門研究年報第一〇号 能の『源氏物語』——源氏能は何を描くのか〕石井倫子〕

光の中にひそむもの——大泉黒石「黄夫人の手」考

山本歩

房子は全身の戦慄と闘ひながら、手近の壁へ手をのぼすと、咄嗟に電灯のスイッチを捻った。と同時に見慣れた寢室は、月明りに交った薄暗がりを買って、頼もしい現実へ飛び移った。寢台、西洋、洗面台、——今はすべてが昼のやうな光の中に、嬉しい程はつきり浮き上つてゐる。(中略) いや、しかし怪しい何物かは、眩しい電灯の光にも恐れず、寸刻もたゆまない凝視の眼を房子の顔に注いでゐる。彼女は両手に顔を隠すが早いか、無我夢中に叫ぼうとした。が、なぜか声が立たない。その時彼女の心の上には、あらゆる経験を超えた恐怖が、……^①

芥川龍之介の怪奇小説『影』（『改造』一九二〇年九月）の一節である。端的に言えばドッペルゲンガーものと言える同作だが、緊張と恐怖の極限はこの、具体的には何も現れてはいない曖昧な場面に訪れる。闇を恐れて点された「眩しい電灯の光にも恐れず」、むしろその下でこそ「何物か」の存在感は強くなる。闇を恐れた近代人が手に入れた文明の火は、しかし怪物を駆逐しなかった。

思えば芥川は『妖婆』（『中央公論』一九一九年九月・一〇月）においても「大正の昭代」、「文明の日光に照らされた東京」に怪談を顕現させようとし、わざわざ「電柱の根元」に「大きな人間の眼」を出現させている。^②大正期半ばの怪奇小説は、電気に代表される近代文明の下に如何に怪談的なものを表象できるかという一つの課題を抱えていたのではないか。

芥川の『影』発表の八ヶ月前、大泉黒石は『中央公論』新年号に「黄夫人の手」を発表した。舞台は長崎市内、中国人「黄塵来」と知り合った「藤三」は、やがて黄一家を巡る奇怪な因縁に巻き込まれていく。塵来の伯父・黄隆泰なる男が藤三

に語るところでは、塵来の生みの母・添嫻（黄夫人）は「窃盜狂」であり、その遺伝を恐れ、あろうことか神に息子の死を誓った。結局、夫人は殺人の罪で刑死したが、切り取られた彼女の手が塵来を崇めて動き回るというのだ。その話を聞いた藤三の部屋にも女の手首が出現し、彼は恐怖に満ちた一日を送ることになる。

同作は発表年の八月、作品集『恋を賭くる女』（南北社）に収録された。管見の限り、一九二三（大正一二）年七月、作品集『血と霊』の収録時に改稿が行われている。一部の口上が変更された他、初出の初刊時には夢オチ——「私が見た大正九年の初夢を、そっくりお話申上げた」とされた結末が変更されている。語り手が「手」の出現について、斬られた獺犬の首が大蛇に食らいついた故事を引きながら合理的な説明を試みるものに変更された。「黄夫人の窃盜癖が消滅しない限り、その窃盜癖と云ふものを信ずる人だけに、かうして明らかに見ゆるのではないか」という末文は、「窃盜癖」自体が隆泰の嘘であることをほのめかしてもしるようだが、物語内容を満足に説明し得るかどうか、仔細な検討が要される。

同作の内容は不可解だ。出来事は多様な解釈を許し、全容は把握できない。全ては隆泰の虚言・妄言かも知れないし、藤三の克服し得ぬ中国人への偏見から来る幻覚であるかも知れない。いずれにせよ作中の怪事は動く「手」の仕業という域を超えており、その魔力の範囲も不詳に終わる。

「黄夫人の手」は怪奇の断片の中を放浪する小説である。そして藤三（あるいは彼を語る語り手）を媒介として、読者は断片にかりうじて語彙やモチーフの連続性を見出す。藤三は内と外を往還する主人公ではなく、二分法の成立しない断片の群を、かりうじて繋ぎ止める関節である。作品の一貫性・完成度という意味で

は評価できない同作であるが、代わりに得も言われぬ不気味さを獲得している。こうした未成感は現代の〈実話怪談〉に近い。

さて、このような断片のひとつとして、同作には電灯に関係する出来事が複数登場する。まず、「四」において藤三の盲目の祖母が、料理中に醬油と間違えて石油を入れてしまう、というくだり。

「それがお前。電灯と云ふものがあるものをつい忘れてもうランプの油が切れる頃と思ふて態々墓地下へ買ひに行きましたのさ」

この森の中へ電線が引かれたのは、既に二カ月前のことでした。

すなわち、「二カ月」前から電氣を使用した電灯を使用していたにも拘わらず、「ランプ」——石油灯の油を買ってきてしまったというのだ。この日、彼女は他にも、使ったことのない（盲目であるために）鏡台を押入れから持ち出し眉毛を抜こうとする、といった常とは異なる行動で藤三を不審がらせている。祖母の奇妙な動作は物語の不気味な雰囲気盛り上げるものであるが、「手」の怪異との関連は明示されない。以下、電灯は怪異との関係性を明示されないままに、しかし繰り返し描き留められる。

「七」において、黄夫人の怪に脅かされた藤三が「バア」に入店すると、「天井から釣るした大きな電灯の光が、ぼうつと暗くなつて家全体がぐらぐらと揺らぐやうな気が」したという描写がある。この後、店内の客すべてが「手首を厳しく握られた」感覚を覚える、大規模な怪異が発生する。

藤三が悪夢を見る箇所（「七」―「八」）で電灯は最も強調される。ここでも、藤三に「眩い光の下では、眠れぬ癖」があるを知るはずの祖母が「電氣は、点けとこうかの？」と常ならぬことを言う。まるで藤三が「手」のために暗闇を恐れているのを見抜いたかのようだ。さらに彼女は明るさを調節するのだと、電灯を風呂敷で覆うのだが、それが前段で藤三が「手」を包んでいた風呂敷なのだから不気味だ。結局藤三は電灯を消して眠りに入るが、恐ろしい悪夢を見ることにな

る（この悪夢も、本筋とどのように連動するのが不明瞭である）。夢の中の印象的な小道具は「赤いランプ」である。これは灯油ランプだと思われる。「四」で電灯と並置されたランプがここで登場することに、何か意味はあるのだろうか。ともあれこの夢から覚めると「消して寝たと思ふ電灯がぼうつと点いてゐる」。「午前六時限り、几帳面に消ゆることを決して違へたことのない」電灯が「明々と輝いてゐ」たのである。藤三が外へ出た後も、「二階の電灯は、ほつと光つてゐ」た。電氣については、最後にもう一度、謎めいた形で言及される。「電灯引込みを勧誘して廻つたこの辺の有志者」が「ややさん」＝塵来の育ての母の、父親だったのである（九）。この、言わば塵来の義理の祖父が、隆泰の素性をほめかし、「手」のねらいは隆泰であるということを見せてくれるのだが、それも全ての空白を埋めるには至らない。³

長崎に電灯事業が興つたのは一八八八（明治二一）年、株式会社長崎電灯によるものであるが、もちろん家庭での電灯利用が普及するのはなお時間がかかる。⁴「黄夫人の手」の時間設定は執筆・発表時の大正八／九年だろうか。一方、藤三を作者・黒石の似姿として、黒石が伊良林に住み鎮西学院中学校に通っていた一九一三（大正元）年―一九一四（同三）年頃だと考えることもできよう。いずれにせよ、家庭用電灯の普及が進む大正前半期を舞台とした作品だろう。

貧しい家庭であるにも拘わらず「電灯は点けとこうかの」と祖母が提案していることから、電氣は従量制ではなく定額制である。先述のように、「バア」入店時には電灯が暗くなる描写がある。また藤三の就寝時に祖母は電灯が明るすぎるのではないかと案じている。これらの箇所から藤三の周囲の電灯は大正期に入つて発達した、金属をフィラメントに使用した電球ではないかと思われる。それまでの炭素線電球やガス灯に対し、これは強い光を放った。このような眩さを背景として、「黄夫人の手」は展開する。そして電灯は「午前六時には几帳面に消える」とあるから、送電は夜間のみ行われ、朝になれば停止する半夜灯である。あり得ない時間に送電されているという意味で、ここでは異常なことが起こってい

る。何らかの干渉によって電灯が点るのである。それは祖母が電灯に風呂敷を被せたことと関係しているのだろうか。

「ややさん」の父が「電灯引込み」を担っていたことを思えば、電灯にまつわるサブ・プロットが準備されていた――が、時間的制約や紙幅の都合で綴られなかった――のではないか。そのように想像したくなるほど、同作において電灯は謎めいた存在感を放っている。少なくとも「黄夫人の手」においては、電灯という近代生活の象徴、科学の産物が怪異の媒介となる。そこに、動く「手」が如何なる作用を及ぼしているのかは定かではないが、少なくとも何者かの干渉を感じて読者はぞっとする感覚に陥る。

前段の「ぞっとする」という表現はマーク・フィッシャーの用語「the eerie」を意識したものだ。フィッシャーによれば、「ぞっとするものの感覚は、何もないはずのところに何かが現前しているときや、何かがあるはずのところに無が現前しているときに生じる」のだが、ここで重要なのが行為主体性（エージェンシー）の問題である。すなわち、何かしらの意図を持った行為主体（エージェント）の予感や痕跡である^⑤。

電灯の明滅に、藤三や読者は黄夫人の行為を感じざるを得ない。無論この感じは非科学的である。電灯を明滅させるものは、一に電気の流れでしかあり得ないからだ。それでもなおぞっとするのは、そもそも電気の流れなるもの自体が知覚困難であるからだろう。それはどこからやってくるのか。誰が流しているのか。送電システムや集中管理のあり方は、電灯の下にいる人々には見えないけれども、しかし確実に存在している。見えないけれど存在するもの。何らかの行為主体を、生半可に想像させるもの。しかもそれは、確かに我々の元に辿り着く。こうした「電気」の性質が、いずこから干渉してくる怪異と親和性を持つことは、意識されてよい。

加えて言えば、「電気」は外部だけでなく、我々の内部にも流れている。生物の体内の微弱な電流――生体電気にも、この時期の黒石はオカルト的な関心を寄せ

ていたようだ。

先述の通り、「黄夫人の手」は『血と霊』収録時に改稿されている。同書において、表題作「血と霊」には「プロローグ」があり、そこには「O」という友人から「この一卷に収めた『血と霊』その他の神秘的な話を聞い」たという^⑥、いわば収録作を梓物語化する一節が登場する。翌年の作品集『黄夫人の手』（春秋社）では、同様の「プロローグ」は「血と霊」から独立して巻頭に配された。すなわち、『血と霊』においては表題作の名が記された中扉以降に「プロローグ」が配されているのに対し、『黄夫人の手』は本扉・目次に続いて「プロローグ」が配され、その後「血と霊」中扉という順序となっている。作品集『黄夫人の手』では、作品集全体の序文としての性格が強められ、その内容は所収の全作――「血と霊」以降の「黄夫人の手」「天女立像」「女人面」「聖母観音」――にかかってくる。さて、この両「プロローグ」において、人体を流れる「電気」が他者に作用することが熱弁されている。

たとへば甲と云ふ男と、乙と云ふ女とが、手をつなぐと、二人の男女は、さながら感応電流に於ける輪道の観を呈し、二者の間に電気が生じ、且つ一方へ流れる事実がわかりました。面白いことは、この甲と乙との心の間に何の感情もなく、冷やかなものであればあるほど、電気は起りません。それは親子であるか或は恋人同志であるとき、最も強いと云ふことまでわかっている今日、別に取り立て、言ふほど不思議なものではないかも知れませんがね、甲の熱情が、甲の肉体の瞬間的な破壊によつて眺び去るとき、その熱情や意志は、エーテルの波動と同じく、乙に伝はるか、さもなければ、殆んど同質同形の血液をもつた他の人に感応するものです^⑦。

これは「黄夫人の手」改稿後の末尾に対応するものであり、改稿と影響関係にあることは明らかである。

これを踏まえれば、窃盗への欲望や、塵来の命を奪う誓い、あるいは隆泰への殺意――いずれか、あるいはすべての「熱情」を秘めた状態で切斷された「手」は、「電気」のようなエネルギーに動かされると解釈できる。この「手」は、

身体および精神の延長として駆動する、一種の道具と見ることもできる。

電気の放つ明るい光も、入り組んだ因縁を解きほぐしはしない。語られることの真偽を明らかにすることもない。むしろどこからかやってくる電流は得体の知れない来訪者である。怪異は電気と相反するものや縁遠いものではない。むしろ、何者かの仕業で、どこからかやってきて、我々と繋がり得る電気なるものは、極めてぞっとする感覚をもたらす意味で怪異に類似する。「七」における悪夢で旧式の「ランプ」が血みどろの惨劇を照らし出すのに比して、目覚めた藤三を包むのは新式の眩い光である。その光の中に、もっと不可解で、もっと曖昧で、それ故に尽きない不安をもたらす、新時代の「怪談」がひそんでいる。

注

- (1) 芥川龍之介「影」、引用は『芥川龍之介全集第二巻』（一九二八（昭和三）年一月、岩波書店）五九三頁より
- (2) 芥川龍之介「妖婆」、引用は『芥川龍之介全集第三巻』（一九五四（昭和二九）年、岩波書店）二〇四、二二七頁より※なお、没後すぐの『芥川龍之介全集』には本人の意向により「妖婆」は収録されていない。
- (3) なお、『中央公論』初出時には老人の発言「電灯を引きますのに五十人以上の申込者がなければ、どうしても会社の方で承知いたしません」（二五五頁）において「会社」に「やさかまち」というルビが振られている。「やさかまち」は「八坂町」（作中の「寺町」の南側にあたる、現在の長崎市油屋町・鍛冶屋町付近）と考えられる。文脈上、「会社」は電力会社を指すはずだが、現時点では不詳。ただ、すぐ近くの本石灰町九番地には九州瓦斯株式会社があり、ガス灯事業を手がけていた。一九一四（大正三）年には長崎電灯株式会社と合併、長崎電気瓦斯株式会社となり、本店も袋町一番地となった（『官報』一九一四年八月二二日）。これが誤認され、電力会社所在地とされた可能性はある。
- (4) 嘉村國男監修『長崎事典 産業社会編』（一九八九（平成元）年六月、長崎文献社）等
- (5) マーク・フィッシャー／五井健太郎訳『奇妙なものとぞっとするもの——小説・映画・音楽、文化論集』（二〇二二（令和四）年二月、Pヴァイン）一〇〇—一〇四頁（原著：The Weird and the Eerie, Repeater Books, 2016）
- (6) 『血と靄』一頁

(7) 同五頁

「黄夫人の手」の引用は春秋社『黄夫人の手』による。また、それを含めたすべての引用は、原則として旧字を新字にあらため、ルビを省略した。

なお、本稿は松本常彦氏の講演「光る国へ・戦間期篇」（近代文学会九州支部秋季大会 二〇二四年十一月三〇日）に示唆を受けたものである。この場を借りて感謝し上げる。

YouTube のコメントからみた アイドルグループのメンバー脱退に関するファンの受容分析

畠山真一 *

1 はじめに

アイドル研究は、近年、社会学、ジェンダー研究、メディア論、音楽学、経営学など、多様な立場からの分析が提示されており、極めて活発な研究領域であると言える。

しかし、管見の限り、アイドルファンダムにおける言説をテキストマイニングの手法を用いて分析した研究はごく僅かな例外を除けば存在しない^{*1}。

本論文は、アイドルグループからのメンバー脱退という出来事が、どのように当該グループのファン集団(ファンダム)に受容されていったのかというプロセスをテキストマイニングの観点から分析することを目的としている。

具体的に言えば、近年メンバーの脱退が発生した King & Prince をターゲットとして、その脱退がファン心理にどのような影響を与えたのかという点を YouTube のコメント欄をテキストマイニングを通じて分析する。

2 King & Prince の脱退劇

本節では、King & Prince のメンバーの変遷について述べる。

King & Prince は、2018 年に岩橋玄樹、平野紫耀、岸優太、神宮寺勇太、永瀬廉、高橋海人の 6 名がジャニーズ事務所内で結成したグループである。しかし、同年 10 月に岩橋玄樹が脱退することにより、5 名からなるグループとなった。

2022 年 11 月、5 名のメンバーの内、平野紫耀、岸優太、神宮寺勇太が 2023 年 5 月をもって King & Prince を脱退することがアナウンスされた。この 3 名はジャニーズ事務所退所後、滝沢秀明が設立した TOBE に移籍するとともに Number.i を結成した。残る 2 名のメンバーである永瀬廉と高橋海人は、そのまま King & Prince を継続して運営しており、現在も活動中である。

King & Prince の CD シングルリリース状況についていえば、平野ら 3 名の脱退アナウンス直前の CD シングルは、『TraceTrace』(2022 年 9 月 14 日リリース)であり、脱退アナウンス直後にリリースされた楽曲が『ツキヨミ』(2022 年 11 月 9 日リリース)である。

また、脱退した 3 名による Number.i のデビューシングルは『GOAT』(2024 年 1 月 1 日)である。

* 尚絅大学現代文化学部文化コミュニケーション学科

^{*1} 張(2024)は、中国の SNS である Weibo データを用いて『ラブライブ!』ファンダムの言説分析を行っており、例外的な研究である。

3 MV へのコメント分析

前節で述べた『TraceTrace』、『ツクヨミ』、『GOAT』の3曲について、すべて YouTube に Music Video (以後、MV) が所属事務所からアップロードされており、MV に対するコメント欄も解放されている。

これらの3曲のMVに付けられたコメントは、メンバーの脱退をファンがどのように受け止めたのかを分析する上で、第一次資料を形成する。すなわち、YouTube にアップロードされたMVに付けられているコメント群は、脱退という大きな出来事に直面したファンの感情がアーカイブされたテキストとみなすことができ、インタビュー調査やアンケート調査とは異なり、直接的に当事者(ファン)の思考を辿ることを可能にする資料として有効であると考えられる。

このような推測に基づき、本研究では、『TraceTrace』、『ツクヨミ』、『GOAT』の3曲のMVに付けられたコメントを通じて、メンバーの脱退というファンにとって極めて大きな出来事がどのように受け止められたかを分析していく。

3.1 調査方法とデータの概要

本研究では、YouTube Data API v3 を利用して、当該MVに付けられたコメントデータを取得した^{*2}。本APIで収集できるデータには多様なものがあるが、本研究においては「コメントしたユーザ名」、「コメント日時」、「いいねの数」、「コメントそのもの」を収集した。以下に「TraceTrace」について収集したデータの一部を提示する^{*3}。

表1 TraceTrace への最も古いコメント

ユーザ名	投稿日時	いいね数	コメント
@miyoms-c4d	2022-08-09T06:00:55Z	0	楽しみ
@mf6815	2022-08-09T06:00:55Z	0	楽しみです
@m_315lx	2022-08-09T06:00:50Z	1	に！！
@z2__xl	2022-08-09T06:00:43Z	2	楽しみー！！！！

ここで投稿日時は、末尾のZが示すようにUTCであり、Zの前は秒数を示している。したがって、本調査で取得した最も古いコメントは、UTCで2022年8月9日の6時00分43秒に投稿されたものである(日本時間では、9時間をプラスした15時00分43秒となる)。

それぞれのMVに対して本調査の実施日と取得されたコメント数は表2のとおりである。なお、コメントは調査日の最新コメントから時系列順に取得した。

^{*2} <https://developers.google.com/youtube/v3/>

^{*3} ただし、コメント本体から絵文字を除去している。

表 2 取得されたコメント数

曲名	調査日	コメント数
「TraceTrace」	2025 年 6 月 2 日	22,895 コメント
「ツキヨミ」	2025 年 6 月 5 日	435,146 コメント
「GOAT」	2025 年 6 月 10 日	405,895 コメント

YouTube Data API は、best effort であるため、実行日時によっては、コメントが 10% 前後しか取得できない場合もあった（特に「ツキヨミ」、「GOAT」）。これが、同一日程で調査を行うことができなかった理由である。コメントのタイムスタンプを見る限り、調査時においてはほぼ全件取得できたと考えられるが、確証は得られていない。

3.2 分析方法

このデータに対して、次の 3 つの分析を行った。

- (1) 対数尤度比にもとづく各 MV へのコメント・コーパスの特徴語抽出
- (2) いいね数の順位が高いコメント分析

それぞれ順に説明していく。

3.3 対数尤度比にもとづく各 MV コメントコーパスの特徴語抽出

テキストマイニングにおける特徴語とは、あるコーパス A を別のコーパス B と比較したときに、 A に特徴的に出現するとされる語を指す。テキストマイニングにおける特徴語検出手法として、カイ二乗値、対数尤度比、相互情報量などが使用されるが、本研究ではコーパスサイズが大きい場合、低頻度語に対して適切な扱いをする対数尤度比を利用して特徴語を検出した (Dunning, 1993; 寺嶋, 2009)。形態素解析には sudachipy を、辞書として sudachidic-full を用いて名詞を抽出し、3 つのコーパス（「TraceTrace」へのコメント文書集合、「ツキヨミ」へのコメント文書集合、「GOAT」へのコメント文書集合）に対し、一つのコーパスを抜き出し、その他の 2 つのコーパスと比較するという方法で名詞の特徴語検出を実施した。特徴語判定のための最小出現回数は 5 としている。

本調査の結果は次のとおりである（10 位までを記載）^{*4}。

^{*4} 「フォッ」は「フォッ♡」という絵文字付きで用いられる感動詞である。また、「ilys」は、Number.i のファンを表現するジャーンゴンである（ただし、正式には iLYs）。

表3 対数尤度比スコアに基づくランキング

	TraceTrace	ツキヨミ	GOAT
1 位	トレトレ	月夜見	Goat
2 位	最高	キンプリ	goat
3 位	曲	ティアラ	3
4 位	信長	キング	Number.i
5 位	センター	5	I
6 位	公記	Prince	ナンバー
7 位	透明感	クロサギ	ilys
8 位	ビジュ	グループ	フォッ
9 位	MV	ichiban	ゴー
10 位	ドラマ	prince	デビュー曲

「TraceTrace」の特徴語には、この曲がテレビドラマ『新・信長公記〜クラスメイトは戦国武将〜』の主題歌であったことが反映されており、「信長」が4位、「公記」が出現していることが特徴的である。

一方、「ツキヨミ」には「5」という数字が特徴語としてあがっている。これは、先に述べたように King & Prince が、この楽曲まで5名で構成されるアイドルグループであったことがコメントに反映されていると考えられる。すなわち、本楽曲は、5名の構成メンバーでの最後の楽曲であるということをコメントに書き込んだユーザが多かったことを意味していると解釈できる。言い換えれば、ファンが「5人で構成される King & Prince」にこだわりを持っていたことが示唆されるのである。同様に、「ティアラ」という King & Prince の女性ファンを表すジャゴンや、「キンプリ」(King & Prince の略語)、「King」、「Prince」、「ichiban」(2022年にリリースされたアルバム『Made in』のリードトラック)など、King & Prince の歴史やそれを取り巻く状況を象徴するような語が特徴語として検出されている。言い換えれば、楽曲の背景的特質を代表している「クロサギ」よりも、グループとして King & Prince の性質を象徴するような語が特徴語となっているのである。

Number.i のデビューシングルである「GOAT」については、曲のタイトルの大文字・小文字を入れ替えたものが数多く特徴語として検出されるが、「ツキヨミ」と同様に「3」という数字が特徴語としてあがっている。これは、Number.i が King & Prince から脱退した平野紫耀、岸優太、神宮寺勇太の3名から構成されるグループであることの象徴であると解釈である。すなわち、5名からなる King & Prince から3名の Number.i へという連続性と切断が表出されており、「脱退した3名による新たなグループのスタート」が強調されていると解釈できるのである。

このように、脱退アナウンスを境にコメント欄の機能が変化したことがわかる。アナウンス前の「TraceTrace」では楽曲やパフォーマンスへの評価の場であったのに対し、アナウンス後の「ツキヨミ」や「GOAT」では、ファンがグループの歴史やアイデンティティを語り直し、感情的に意味づける言説空間へと変容していたことが、特徴語の変遷から理解されるのである。

3.4 いいね数の順位が高いコメント分析

続いて、いいね数の順位が高いコメント分析を行う。

それぞれの楽曲について、いいね数が高かったコメントの上位3位は次のとおりである(カッコ内は、YouTube のアカウント名といいね数である。なお、本稿は全角コンマを読点として使用しているが、次のコ

メント一覧ではオリジナルテキストをそのまま使用している)。

TraceTrace

- 1 位「こんな辞めてほしくないと思ったグループ初めて。溢れ出す人柄の良さ、パフォーマンスのすごさ、純粋に応援したくなる。」 (@JS-xg4wq, 3755)
- 2 位「永遠なんて存在しない。けど、キンプリはこの先 10 年、20 年と 5 人で居続けるとってたし、のちにジャニーズを牽引する国民的存在になるんだろうなとも他 G 担ながらに見てて思っていたからこそ、5 年目を迎える前にバラバラになるなんて信じられないし辛い」 (@olqonom, 2896)
- 3 位「最初は顔が良いグループっていう印象だったけど、全員が圧倒的パフォーマンス力を持っているから、今や顔の良さは付属品みたいになってる。もっともっと売れていいグループだと思うし、いずれ令和を代表するグループになると思ってます。」 (@saya1202, 2574)

ツキヨミ

- 1 位「推しのいる楽しさも辛さも教えてくれたのはキンプリが初めてだったよ！！五人を推して後悔なんてしてないし幸せな時間だったよ、頑張ってくれてありがとうって伝えたいし、届いてくれてればいいな、五人に、ここのコメ欄にいるティアラとキンプリを応援したいみんなの思いを。※届いてたね、こちらこそありがとう！！五人まるっとずーっと応援するよ！！」 (@レモン-t8x, 5304)
- 2 位「ここにいるティアラは年齢も地域もバラバラなのに、キンプリを愛する団結力に毎日感動します。そしてたくさんの人に愛されてるキンプリは素晴らしいグループですね。」 (@miyu.2259, 3,644)
- 3 位「キンプリは路線変更ではなく路線拡大しているところが魅力のひとつだと思う！色んなジャンルをこなしていくのは簡単な事じゃない。けど彼らが完璧にしていけるのはやっぱりたくさんの努力と素晴らしい実力があったからだよね！あとこのメンバーだから支えあって来れたんだと思う！そして彼らのパフォーマンスをいずれ世界に繋いで行けたらって今でも願ってる！ファンもメンバー達の色々な姿が見れて嬉しいし、やっぱり私はもっとこのメンバーの進化と一緒に見届けていきたいよ、、、そう思い、微力ながら毎日ここに来ています！！イオサ他化になることで絶対にかしら彼らの未来に繋がると思っています！！同じ気持ちの方ぜひ一緒に頑張ってくださいか！？」 (@河合唯伽 3,549)

GOAT

- 1 位「いつもお世話になっております。北山担の者です。微力ですが御手伝いに参りました。ファミリーは大切な仲間です。」 (@suzu-haru02, 8676)
- 2 位「3 人がこだわって作った作品が世界のたくさんの人達に届きますように」 (@ori4007, 7878)
- 3 位「日本人のアイドルが、日本人のクリエイターがつくった、日本で撮影した、とにかく Made in Japan な日本の音楽を世界に届けようとしてるところが全然彼らの目標が曲がってないからほんとに推せる！」 (@129sho97, 7056)

脱退アナウンス直前にリリースされた「TraceTrace」MV に対しては、メンバー脱退もしくは 5 人体制の終焉に対する悲しみがいいね数 1 位と 2 位のコメントによって表現されていると解釈できる。しかし、脱退アナウンス後にリリースされた「ツキヨミ」MV に対しては、悲しみではなくむしろ「今までの活動に対する感謝」がいいね数 1 位と 2 位のコメントによって表現されている。いいね数 1 位の @レモン-t8x のコメントは、2023 年 3 月 7 日に投稿されたものであり、この時点で、ファンダム (ファン共同体) の中で、メンバー脱退に関してある種の納得感が形成されているとともに、ある種の思い出 (ノスタルジー) が集合的に形成されてい

ることを伺わせるという点で極めて興味深い*5。

一方、脱退メンバーによって構成された Number.i のデビューシングルである「GOAT」MV へのいいね数 1 位のコメントは、元 Kis-My-Ft2 メンバーであり、TOBE に移籍後の 2023 年 11 月 17 日にソロデビューした北山宏光ファンからの投稿であるとされている点が注目される。

この事実は、ファンダムが、所属事務所というより大きな枠組み（いわゆる「TOBE ファミリー」）の中で連帯し、互いを支援しあうという新しい関係性が生まれつつあることを示唆している。アーティスト間の絆をファンが可視化し、祝福する行為自体に大きな価値が見出されていると言えよう。

4 おわりに

本研究は、King & Prince のメンバー脱退という出来事に対し、ファンの受容プロセスがどのように変遷したかを YouTube コメントから分析した。

特徴語といいね数の分析を通じて、危機的状況に直面したファンの感情が、当初の「悲しみ」（「TraceTrace」）から、グループの歴史を再解釈する中での「感謝と納得」（「ツキヨミ」）へと変化したこと、そして、さらに脱退メンバーが結成した Number.i が所属する新しい所属事務所内の「新たな連帯と応援」（「GOAT」）へとダイナミックに変容していく過程の一端を実証的に示した。

本研究では、特徴語およびいいね数という観点から分析を与えたが、トピック分析や投稿者集合に関する分析（継続的な投稿者と新規投稿者の集合の推移や大量投稿者の言説分析等）など重要でありながら実施されていない分析が残っている。また、本研究では絵文字を除去をした上で分析を実施したが、ファン感情の多様性を考慮すると、情意的アイコンである絵文字は重要な手がかりとなることは間違いないであろう。このような観点を含みより包括的な分析については別稿に委ねたい。

参考文献

- 田島悠来 (編) (2022). 『アイドルスタディーズ』. 明石書店.
- 寺嶋弘道 (2009). 「日本語教育語彙を選定するための統計的指標－尤度比検定、カイ 2 乗検定、イエーツの補正公式の特徴－」, *Polyglossia* **17**: 71-83
- 張哲源 (2024). 『中国におけるアイドルアニメファン層の研究: 『ラブライブ!』シリーズに関する Weibo オンラインデータの分析』. 法政大学国際文化研究科修士論文. https://hosei.ecats-library.jp/da/repository/00030922/24_thesis_master_22Q8102.pdf よりダウンロード (閲覧日 2025 年 6 月 30 日)
- Dunning, Ted (1993). “Accurate Methods for the Statistics of Surprise and Coincidence,” *Computational Linguistics* **19**(1): 61-75.

*5 先に述べたように、「ツキヨミ」のリリースは 2022 年 11 月 9 日であり、およそ 4 ヶ月で納得感が形成されていることになる。

執筆者紹介 (掲載順)

飯富章宏	本学講師 (非常勤)
山本 歩	昭和女子大学准教授
畠山真一	本学教授

尚絅語文 第 14 号

令和 7 年 12 月 1 日 発行

編集・発行者 尚絅大学現代文化学部日本文学懇話会

住所 〒862-8678 熊本市中央区九品寺 2-6-78

電話番号 096-203-6300

題字 林田俊一郎